
ハートキャッチプリキュア！VSフレッシュプリキュア！

リュウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートキャッチプリキュア！VSフレッシュプリキュア！

【Nコード】

N8108Q

【作者名】

リュウキ

【あらすじ】

ラビリンスの残党セントラルを追ってハートキャッチの世界にやって来た

キュアピーチしかしセントラルは砂漠の使徒と手を組んでしまう
だがキュアブロッサムたちと出会い共にセントラルの野望を阻止する。

プロローグ「奪われたしあわせ」(前書き)

どうも初投稿です。この小説はVS戦隊シリーズのプリキュア版です。

多少キャラの性格が原作と違ったりするかもしれませんがご了承ください

プロローグ「奪われたしあわせ」

ここはクローバータウンと呼ばれるとある町

そこに住む人々はいつも笑顔が絶えないくらい幸せに満ち溢れていた。

しかし今回いつもと違うようである住民たちはどこか暗い感じの表情をしており

まるで絶望に満ちたような表情であった。

そんな人々の頭上のビル上の屋上からなにやら会話が聞こえる。

サングラスをかけ奇妙な黒服を着た男が二人組みの少女に追われていた。

キュアピーチ「待ちなさいっ!!」

???「!??っ：たくしっこい連中だ」

そう言う男の前からもう二組の少女が現れた。

キュアベリー「もう逃げられないわよ」

「チツ挟み撃ちか!」

キュアパッション「セントラル、あなたが奪ったみんなの幸せ返してもらおうわ!」

セントラル「あいにくこいつは、俺の計画には欠かせないものでね!」

キュアベリー「だったら力づくで返してもらおうわよ、いくわよパイン!」

キュアパイン「うん!」

そういつてベリーとパインは同時に飛び上がりセントラルにとび蹴りを放った。

ベリー、パイン「ダブル・プリキュア・キックっ!!」

しかしセントラルは素早く交わし手に持っていた杖で二人をはじき返した。

ベリー、パイン「きゃっ!」

ピーチ「ベリー! パイン!」

パッション「たあああっ!!」

次の瞬間パッションがセントラルに向けて特攻する!

セントラル「ぐっ!!」

勢いで体制を崩したセントラル

パッション「今よ、ピーチ!」

ピーチ「OK, 悪いの悪いの飛んでいけ! プリキュア・ラブサンシヤイン!!」

桃色の光線を放つも慌てて回避するセントラル

セントラル「なかなか楽しませてくれるね、プリキュアども」

そうセントラルは微笑みながら次の瞬間

セントラル「だがお遊びはここまでにしよう、もうこの世界に用はない!!」

ピーチ「なに、何なの!」

突然セントラルの体が赤くなり

持っていた杖を地面に突き刺すと同時に空間がゆがみ始めた。

タルト「アカン! アイツ別の世界に逃げる気や!」

ベリー「なんですって?」

シフォン「プリ?」

ピーチ「そんなことさせないよ!!」

咄嗟にピーチはセントラルに飛び掛ろうとする。

パッション「ピーチ!」

タルト「ピーチはん!」

その瞬間あたりは白い光に包まれるそして光が晴れるとそこにはピーチとセントラルの姿はなかった。

プロローグ「奪われたしあわせ」(後書き)

プロローグが終わり本編スタートです。

CHAPTER 1 「デパート店オープン！」 (前書き)

それでは本編スタートです。

チャプター1「デパート店オープン！」

ここは希望ヶ花と呼ばれる町、この町に住む人々はいつもさまざま
な悩みを

抱えながらもお互いの気持ちをぶつけ合い時にケンカして時笑いあ
ったりもする

ごく普通の平凡な町である。その町に大きなデパートがそびえ立っ
ていた。

デパートの4階、紳士服や婦人服などが売られているこのフロアに
本日開店と書かれたファッション店があった。

えりか「じゃーん！ようこそフェアリードロップデパート店へ」

いつき「うわあ、大きい」

ゆり「意外と広いわね」

つぼみ「はい本当です！広すぎます。」

それは昨日の出来事である。

つぼみ「デパート店…ですか？」

えりか「そうそう、実はさママのお店がデパートにも出来ちゃって、
明日オープンするんだよ」

つぼみ「へーすごいじゃないですか！」

えりか「それでねー！今度そのデパートでファッションコンテスト
やるんだって」

つぼみ「ファッションコンテスト？」

えりか「そのコンテストにあたし出るんだけど、つぼみはどうする
？」

つぼみ「あっはい！もちろん出ます。」

えりか「よーし！そうと決まれば、いつきとゆりさんにメールだね」

さくら「ママちょっとこれからデパートの社長さんと大事なお話があるから、」

えりか「うん、わかった。」

さくら「あと、ほかのお客さんの迷惑にならないようにね。」

えりか「大丈夫、大丈夫、」

そう言った後、母さくらは嬉しそうな顔でその場を去った。

つぼみ「えりかのお母さんんだかはりきってますね。」

えりか「そりゃもう、こんな大きなデパートにもお店できたんだから嬉しくなるよ

あっせつかくだからお店の中案内するね。いろいろ入荷してるんだ。

」

えりかがみんなにお店を案内してる頃フェアリードロップの隣にある洋服店の試着室でとある三人組が訪れていた。少し奇妙な格好し腰に剣を

ぶら下げた赤い長髪の男が退屈そうに腕を組んでた。試着室のカーテンが開くと

変わった髪の女性がドレス姿で出てきた。

サソリーナ「どうく似合うかしらん？」

コブラージャ「全然似合っていないよサソリーナやはり君の

ファッションはセンスがなさ杉る」

サソリーナ「な！なんですってー！！」

そういつて青い髪の長髪の男が試着室に入ってスーツ姿で出てきた。コブラージャ「見たまえこの衣装、この服こそ美しいばくにピツタリだ。

そうは思わないかい？」

サソリーナ「ケツ、どこがよアンタのほうがよっぽど似合わないわ

よ」

コブラージャ「ぐう！、服を選ぶセンスがゼロの君に言われたくないね！！」

サソリーナ「アンタに言われたかないわよ！！」

二人の口論が始まりそしてこの会話をクモジャキーは退屈げに見ていた。

クモジャキー「よう分からんぜよ、」

クモジャキーは服のことで言い争う二人に呆れてその場を去った。

一方つぼみたちの方では

いつき「うわあ〜！かわいい〜！！」

ポプリ「でしゅ〜」

子供のようにあたりをキョロキョロ眼を輝かせるいつき

ゆり「なんでもそろってるのね」

えりか「うん、そりゃあオシャレの専門店なもの」

ももか「あつゆりー！」

後ろの方から声がした。

ゆり「ももか、」

えりか「あれ？もも姉今日モデルの仕事があるんじゃないの？」

ももか「そのはずだったんだけど、今日一緒に撮影するモデルの子がこれなくなっちゃってさ、それで中止になったのよ」

えりか「へ〜、そうなんだ」

ももか「ヒマだったしせっかくだからオープンしたばかりの

お店にでも行ってみようと思ってね」

えりか「ところでさ、もも姉はコンテストに出るの？」

ももか「うーんどうかな、私も出ようかな？」

ゆり「ももかが出場すれば優勝は間違いないと思うわ」

ももか「ありがとゆり、あっそうだこのデパートの1階に

ドーナツ屋さんができたの知ってる？」

ゆり「いえ、知らないけど？」

ももか「後で言ってみない？」

ゆり「ええ、いいわよ」

えりか「あー！ずるいよ二人でドーナッツ食べに行くなんて」

ももか「ごめんごめん、じゃあ食べに行くときみんなも誘うね」

ゆり「ねえ。ももかこの服なんてどうかしら」

ももか「結構いいと思うな、試着してみる」

そういつてももかとゆりは試着室の方に行った。

つぼみ「えりか」

つぼみが息切れそうな声でえりかに近づいてきた。

えりか「あれ？つぼみどこいったの？」

つぼみ「すいません。あまりにも広くてつい道に迷ってしまいました。」

えりか「まあ、こんなに広いと迷うよね」

つぼみ「小さい頃お母さんと大きなスーパーにいった時

よく迷子になったことがあるんです。」

えりか「はは：つぼみらしいね。」

つぼみ「あっ笑わないで下さい！」

つぼみはすこし落ち込んでしまう

えりか「つぼみ、元気だしなよ」

えりか「あっそうだ！つぼみ」

つぼみ「なんですか？」

えりか「このデパートの1階に花屋さんがあるんだよ、

珍しい花もいっぱいあるんだって」

つぼみ「珍しい花ですか！」

えりか「いつきー！つぼみと一緒に花屋さんに行くけど行く？」

いつき「うん、いいよ」

三人は1階へと降りていった。その頃2階のゲームセンター
何台も並んでいるゲーム機その対戦格闘ゲームのイスにサングラ
スをかけ派手な

黒ジャンパーを着た男が座っていた。

セントラル「この建物から無数の幸福を感じられる。

この世界の幸福も俺の力ですべて吸い尽くしてやる…ククク…」

学生「あっあのすいません…やらないんですたら…席譲ってくださいま
せん…」

セントラル「……………」

チャプター1「デパート店オープン！」（後書き）

つぼみ 「なんかえりかばかり喋ってるような…」
えりか 「そうかな？」

チャプター2「ラブとシフォン」(前書き)

チャプター1は文字数が多かったので今回減らしてみました。

チャプター2「ラブとシフォン」

とある世界の話キュアピーチがセントラルと共に姿を消してからすぐの出来事

パッション「ピーチが…消えた?…」

タルト「間違いあらへん! ピーチはんも一緒に別の世界に行ってもうたんや!」

パッション「早く、私たちも後を追いましょ!」

タルト「せやけど無理や、パラレルワールドは無数にあるさかい探すのは困難やで!」

辺りを見渡すパイン

パイン「あれ?…」

ベリー「どうしたの? パイン」

パイン「シフォンちゃんがないの!?!」

ベリー「なんですって!?!」

周りを振り向くタルトとベリー

タルト「ホンマやシフォンもおらへん!」

パイン「さっきまで一緒にいたんだけど…」

タルト「こがいなときにどこいったんやシフォンのやつ?」

パッション「ラブ…無事でいて」

そういつてパッションはピーチの身を案じた。

つばみたちのいるデパートからそう遠くない場所に公園があり時刻は昼を過ぎていた。

公園の砂浜で遊ぶ子供やベンチに座って昼食をとるサラリーマンもいる。

そんな人気のない公園の草むらで女の子が一人倒れておりその隣には赤ちゃんの格好をしたぬいぐるみが落ちていた。

「キュア?」

ぬいぐるみはひとりでに動き倒れている少女をさすった。

「ラブ：ラブ：」

いくらさするもラブという少女は倒れたままである。

「プリプ〜！」

するとぬいぐるみの額の模様が光り少女は見る見るうちに宙に浮いてしまう。

ラブ「うう…」

ラブという少女は意識を取り戻した。

ラブ「シ！シフォン！？」

シフォン「キュアキュア〜」

ラブはシフォンが自分を宙に浮かばせることに驚いた。

ラブ「シ、シフォン！お願いだから降ろして〜！」

シフォン「キュア？」

シフォンは超能力を解除してラブは地面に落ちた。

ラブ「いったたた…」

意識を取り戻したラブにシフォンが飛びついてきた。

ラブ「シフォン？」

シフォンは泣きそうな顔で言った。

シフォン「ラブ：よかった…ぶじで…」

ラブ「そっか…あたし気を失ってたんだ」

そういつてシフォンをやさしく抱きしめた。

ラブ「ありがとうシフォン」

ラブはあたりを見ると見知らぬ場所であることに気づく

ラブ「ここ…どこだろう？」

ラブは再びあたりを見渡すと自分とシフォンしかないことに気づきラブはしばらく

公園を走り回りながら友達の名前を叫んだ。

ラブ「せつなー！！美希たーん！！ブッキー！！」

しかしやはり自分とシフォンしかないことを実感する。

ラブ「どうなってるんだろ…」
ラブは落ちついて気を失う前の出来事を順番に思い出していた…

チャプター2「ラブとシフォン」(後書き)

ここからしばらくラブの回想に突入します。
当初考えたプロットと大きく変わっちゃいました。

回想1「あれから3ヶ月・・・」 (前書き)

回想編第一回です。この話はプロローグの部分より前の話になります。

多分原作の設定と色々矛盾してたりしてるところがあるかもしれませんが

ご了承ください。ちなみにチャプター、回想と区切っております。

回想1「あれから3ヶ月・・・」

雲ひとつない晴れの朝、世間は春の季節を迎えていた。

クロバータウン・ストリートと呼ばれる商店街色々な店が出てる中でひとつの

住宅があった。かつてこの住宅が10年前までは畳屋であったが代々畳み職人をしていた老人が亡くなっているらしい畳屋は廃業となった。以後この家は

サラリーマンの父とパートで働く母ともうすぐ中学3年生なろうとする少女の

三人暮らしである。少しくらい前までは少女の友人が居候のみで同居していたが

その友人はやるべきことを果たすため少女の家を去った。

少女の友人がこの家を出て行っからはや3ヶ月のことである

「ラブー！いつまで寝てるの」

「ひゃっ！」

ごく普通の少女の部屋この部屋にはMIYUKIと書かれたアイドルユニットの

ポスターが張られている。そして今この家の母親が少女を起こしたようだ。

ラブ「お母さん！？」

あゆみ「もう、春休みだからって

いつまで寝てるのよ、もうすぐ3年生になるんでしょ」

ラブ「ごめん…お母さん」

あゆみ「それよりもラブ、今日はミユキさんのレッスンがある日じやなくて？」

ラブ「えっ？」

ラブは驚きカレンダーを見た。

ラブ「あーっ！そうだった！」

そしてラブは目覚まし時計を見るとすでに8時を過ぎていた。

ラブ「ゲゲエ、もうこんな時間だよ！」

ラブは急いで着替えて物凄い勢いで家を飛び出した。

あゆみ「ああっラブ！朝ごはんどうするのよ！」

そういうわれてラブは慌てて戻ってきてトースターで焼いた食パンをくわえ出て行った。

ラブ「モゴモゴモゴゴ！（訳…いってきます！）」

あゆみ「ちよっと、ラブお行儀が悪いわよ！」

ラブを注意しようと外にでるあゆみ、しかし既にラブの姿は見えなかった。

あゆみ「もう、ホントあの子ったら…」

あゆみが家に入ろうとすると二人ぐらいの女の子が尋ねてきた。

美希「こんにちは、おばさん」

祈里「こんにちは」

あゆみ「あら、美希ちゃんに祈里ちゃん、こんにちは」

美希「あの、ラブまだ寝ています？」

あゆみ「ごめんねーさっき一足先に出て行っちゃったのよー」

美希「そうだったんですか、」

祈里「私たちラブちゃんを起こしに来たんです。」

あゆみ「あら、そうだったの！本当悪いわね…」

美希「それではおばさん失礼します。」

二人はラブの後を追いながらミュキの待つ広場に行った。

食パンを食べながら走るラブ、その通る方角にひとりの男の子がなにやら

モジモジとして顔を赤くしていた。

大輔「よっ…よしっ！今日こそアイツにおれの気持ち伝えるぞ！
そういつて大輔という男の子はトリニティと書かれたダンスチケットを

2枚握り締めていた。

大輔の前方からラブが走ってくる。

大輔「きつ来た！？」

だが大輔は緊張が高まってきた。

大輔（だ…だめだ…緊張しすぎて声がでねええ…）

ラブは大輔を通り過ぎようとしていた。

大輔（こうなりゃヤケだっ！）

そう思った瞬間ラブに向かって大輔が喋った。

大輔「お…おいラブ！…」

ラブ「モゴモゴモゴゴ！（訳…ゴメンまた今度！）」

そういつてラブは大輔のもとを走り去っていった。

大輔はただラブのうしろ姿を見て啞然とした。

大輔「はあ…」

ラブたちがいつもダンスレッスンをする広場の近くに水色の車が停車していた。

そこにはサングラスをかけた中年ぐらいの男がその場所でいつもドーナツ屋を

運営していた。

口に食パンを詰めて走るラブにドーナツ屋の男が語りかけた。
カオルちゃん「ようお嬢ちゃん、そんなに慌ててどーしたの？ドーナツ食べてく？」

ラブ「モゴモゴモゴゴ！（訳…あとで食べるー！）」
そういつてラブはドーナツ屋を通り過ぎていった。

カオルちゃん「口に物を詰めて喋ったんじゃないよ…ぐはっ！」

カオルはラブの走り去った方角を見つめた。
カオルちゃん「青春だねえ」

食パンを食べ終わるとラブが向かう先にピンク色のポニーテールとモデルのように

スタイルが整った女性がひとり立っていた。

ラブ「ミュキさーん！」

ミュキ「あっラブちゃん！」

ラブは急いでミュキのもとまで駆けつけた。

ラブ「す、すいません！おそくなりました！」

ミュキ「大丈夫よ、まだ2分はあるわ」

ラブはホッとため息をつかせた。

ミュキ「あら？ラブちゃん、美希ちゃんと祈里ちゃんは一緒じゃないの？」

ラブ「えっ？二人ともまだ来てないんですか？」

ミュキ「美希ちゃんがねラブちゃんがなかなか来ないから祈里ちゃんと一緒に迎えにいったんだけど」

ラブ「えっ！そうだったんですか！ううう…二人に悪いことしちゃったよ…」

するとラブがきた方角から美希と祈里が走ってきた。

美希「ラブー！」

祈里「ラブちゃん！」

ラブ「美希たん！ブッキー！早く、早く」

美希と祈里がミュキのところまでたどりついた。

ミュキ「セーフっ！よかったわねギリギリ間に合ったわ。」

ラブ「やったねえ！美希たん！ブッキー！セーフだよ！」

美希「もう！誰のせいで遅れたと思ってるのよ」

ラブ「えへへ・・・ゴメンあとでドーナッツおごるからさ機嫌直して、」

ミュキ「さあ、みんな早くレッスン始めるわよ、まずは準備体操から、」

ラブ、美希、祈里「はいっ！」

ラブがミュキのダンスレッスン広場に向かっていった後しばらくして母あゆみが鼻歌を歌いながらラブの部屋を掃除していた。

あゆみ「ふんふふふん♪」

あゆみが掃除中部屋の窓から小さな影が見えた。

そこには赤ちゃんのぬいぐるみを風呂敷で抱えたフェレットのような生き物が窓の外で除いていた。

「うーん、ピーチはんもおらへん」

するとあゆみが窓のほうを振り向いた。

「ぎっく！」

フェレットぽい生き物は慌てて隠れた。

あゆみ「あら？変ねさつき窓にタルトちゃんがいたような気がしたんだけど？」

タルト「はあ・・・はあ・・・」

あゆみ「まさかねえ！ふうんふん♪」

そういつては鼻歌を歌いながら掃除を再開した。

タルト「はあ・・・はあ・・・危ないところやったで・・・」

シフォン「きゅあ？」

タルトは2階から地上に降りるよう飛んで草むらに隠れた。

タルト「ベリーはんもパイはんも家におらへん、学校も休みにな
つとるし」

他にあの三人が行きそうなところはというと・・・」

そうタルトは考え思い出した。

タルト「やっぱり、あつこしかあらへん！」

そういつてタルトはシフォンを風呂敷に詰めたまま飛び出していっ
た。

その頃ラブたちがダンスレッスンをして3時間が経過していた。

ラブたちは皆、汗をダクダクとかいていたそこでミュキから休憩が
下りた。

ミュキ「はい、じゃあみんなここでいったん休憩、みんなよくがん
ばったわね。」

ラブたちは持ってきたバッグで汗を拭きながら水分を補給していた。

ラブ「うーん！いい汗かいたー！」

祈里「はい、ラブちゃんタオル」

ラブ「ありがとうブッキー」

美希「帰ったらシャワー浴びないとね」

ミュキ「みんな、3人ともすっごく息が合ってたわよ！」

ラブ「ホントですが！」

ミュキ「ええ、」

祈里「すごい！」

ミュキ「この調子なら今度の大会も優勝間違い無しね。」

美希「イエーイ、私たち完璧！」

それから少しぐらい時間がたつとラブのお腹の虫になった。

ぐうぐ

ラブ「ううー、いっぱい動いたからお腹がすいたよー」

美希「もう、ラブったら」

祈里「ラブちゃんらしい」

ミユキは時計を見ると既に12時を過ぎていた。

ミユキ「あらもうこんな時間、じゃあみんなそろそろお昼にしまし
ようか。」

ラブ「待ってましたー!」

ミユキ「私、カオルちゃんのところでドーナッツ買ってくるから
みんなはそこで休んでて」

ラブ「わーい! ドーナツ、ドーナツ♪」

ミユキはカオルの所へとドーナツを買いに行った。

ラブの隣に座っていた祈里はチャックが開いていた

ラブのバックの中身が見えてある物に気づいた。

祈里「あれっ! ラブちゃんもしかしてこれ?」

ラブ「あっ! これね」

ラブは祈里に聞かれてバックから赤いジャージを取り出した。

美希「それっせつなの練習服じゃない! どうしたのよ」

ラブ「ははは・・・実はさ・・・せつながいた頃よくあたしがせつ
なの練習服、

バックに入れて持って行ってたんだ。」

祈里「へーそうだったの」

ラブ「それでね、たまによく間違えて入れちゃうんだよね。

ほらあたしドンクサイところあるからさ・・・はは」

祈里「ううん、そんなことないと思うよ」

ラブ「えっ?」

祈里「間違えてバックに入れるってことは

ラブちゃんがせつなちゃんのことをいつまでも覚えてるって証拠
だよ」

ラブ「ブッキー・・・」

美希「思い出すわね、4人でダンスやって大会にも優勝したものね。

」
祈里「あの頃が一番楽しかったなあ・・・それにこの服。」

ラブ「うん！知ってるよ、ブッキーが作ったんだよね。」

祈里「せつなちゃん最初は私と同じで自分からダンスをする勇気がなかったけど一緒に練習していく内にダンスに興味を持ってくれたんだよね。」

美希「せつな・・・今頃どうしてるのかしらね・・・」

ラブは3ヶ月前、せつなと別れを告げる時の出来事を思い出していた。

せつなと呼ばれる少女、彼女はラビリンスと呼ばれる異世界の住民であった。

生まれ故郷ラビリンスは総統メビウスと呼ばれる独裁者の手によって感情を

管理されていた。せつなが初めてラブたちと出会ったのはお互いが敵同士という

関係であった。自分の正体を隠しながらも幾度となくラブに接触しては

その度にせつなに感情が芽生えてきた。だが度重なる失敗によりせつなは

メビウスに寿命を奪われるしかし：奇跡が起こりせつなは4人目のプリキュアとして

生まれ変わった。そしてラブたちと共にプリキュアとしてラビリンスと戦いついには

総統メビウスを倒したのだ。しかし総統メビウスの正体は

ラビリンス人たちによって作り出されたコンピューターのプログラムだった。

せつなは故郷ラビリンスをラブの町、四ツ葉町のように幸せあふれる世界に

したいと願い元の世界、ラビリンスへと帰っていったのである。

ラブは上を見上げる。

ラブ「大丈夫だよ、せつなならきつと出来るはずだよ！」

美希と祈里もうれしそうな顔で言った。

美希「ええそうね、それがせつなの夢だもの」

祈里「うん、私信じてる。」

そういつて3人は雲ひとつない青空を眺めた。

回想1「あれから3ヶ月・・・」
(後書き)

後書き 次回は回想編2回目です。

回想2「あらたな敵、セントラル出現！」（前書き）

回想編2回目です。間違っていると色が色々あるかもしれませんが
ご指導などしていただけたら幸いです。

回想2「あらたな敵、セントラル出現！」

時刻はまだ12時になって間もない頃さっきまで雲ひとつない青空が突如曇りだしてきた。自宅で洗濯物を干しているあゆみは曇ってきた空を見上げる

あゆみ「あら変ね、今日の天気予報じゃ晴れだったんだけど？」

ラブたちの住む町クローバータウンストリートの全体が見える丘の山でひとりの

少女が立っていた少女の顔はなにやらとても真剣な表情で

クローバータウンストリートを眺めている。

少女「私の勘が正しければあいつは間違いなくこの町に来てる…」
冷たい風が少女の体を突き抜けていく

少女「何とかして見つけないと・・・この町の人々を巻き込むわけにはいかないわ」

すると少女の携帯から電話が鳴り出した少女は急いでケータイを取り出した。

少女「もしもし？」

「ぼくだ、お前の予想通り町で奴を見つけた！」

少女「ホント！今どこにいるの？」

「建設中のビルの方へむかっていった。」

少女「わかった、わたしもすぐにそっちに向かうわ」

そういつて少女は掛かってきた電話を切った。

少女「一刻も早くあいつを見つけないと・・・」

そのころミュキがドーナツを買いに行ってから数十分がたったいたラブたちは

腹の虫を鳴らせながらミュキの帰りを待っていた。

「ううん…ミュキさん遅いねえ…」

美希「そういえばこの時間、カオルちゃんのドーナツ屋さんが込む

時間だったわね」

すると柝里はなにやら思い出した。

柝里「ドーナツかぁ…タルトちゃんとシフォンちゃん今頃どうしてるかな〜？」

ラブは思い出したかのように行った

ラブ「ふたりともスイーツ王国にかえちゃたんだよね…」

美希「きっと元気でやってるんじゃないかしら？」

柝里「元気でやってるかなあ〜」

するとラブたちが座ってる方角から何かが近づいてきた。

「あっ！おったで〜」

「きゅあ？」

ラブ「そういえば最初ブッキー、フェレット嫌いだったよね。」

美希「そう、そう、それでブッキーがタルトから距離をとってたのよね」

柝里「もう、ふたりったら〜」

「おーい、ピーチはーん、ベリーはーん、パインはーん」

するとどこからか声がした。しかしラブたちは気づいてなかった。

ラブ「みんなでシフォンのお世話もしたよね」

柝里「美希ちゃんがブルンを出そうとしてシフォンちゃんを預かったりしたよね」

美希「したした」

「らぶ〜、みき〜、いのり〜」

するとラブたちの耳に声が聞こえた。

ラブ「なんだかタルトとシフォンの話をしてると声まで聞こえてきちゃったよ」

美希「なんだかわたしも、」

柝里「みんな恋しいのね」

すると3人の目の前に何かがいることに気づいた。

ラブ「えっ？」

ラブはわが目をこすりもう一度確認するとなにやらフェレットのよ

うな

生き物がぬいぐるみを布で巻いて背負って立っている

タルト「みなはん、お久しぶりやな」

祈里「タ…タルトちゃん？」

シフォン「ぷりっぷー！」

美希「シ…シフォン？」

ラブ「てっ…ええええ！！」

3人は突然の出来事に驚きを隠せなかったその頃

クローバータウン・ストリートの商店街から少し離れたところに建設中のビルが

あったこの日ビルの作業にあたっていた作業員は殆どが外食や買出しに行つてビルは

無人そのものだったそのビルにサングラスをかけ派手な黒ジャンパーを着て

白い肌をした男がひとりビルの中に入っていた。そしてしばらくすると

ふたり組みの男があとを追ってきた片方の男は少し筋肉質な体格をして

もう片方の男は華奢な体系で後ろに髪を結んでいる。

筋肉質な男「ついに追い詰めたな」

華奢な男「間違いなく奴はここに入っていた、入るぞ！」

そういつて二人組みの男はビルに入った不審な男を探すように進んだ一つ一つビルの

中を確認しながらするとサングラスをかけた不審な男を3階の階段で見つけた。

華奢な男「いたぞ！」

二人の男はすぐに男の後を追ったすると3階の奥の大鏡がある

部屋へと逃げるように入っていた。

筋肉質な男「あの部屋に入っていたぞ！」

しかし二人の男が後を追って部屋に入るとそこには先ほどの不審な

男はいなかった

ただ二人の目の前にはただ大きな鏡が立ててあっただけである。

筋肉質な男「そんなないだっ！」

華奢な男「もう少し探してよう何処かに潜んでるかもしれない！」

しかしこの部屋の隅々までさがしても部屋の中には後から入ってきたこの

二人組みの男しかいなかった。

筋肉質な男「どうなってるんだ！この部屋は隅々まで探した……」

華奢な男「おかしい、たしかにこの部屋に入っていくのをぼく達は見た！」

筋肉質な男「まさか！逃げられたのか？」

華奢な男「その可能性は否定できない……」

すると髪を後ろに結んだ男のケータイから電話が掛かってきた男はケータイを取った。

華奢な男「もしもし？」

少女「セントラルは見つかったの！」

華奢な男「いや……どうやら一足先にまかれたようだ……」

少女「……」

少女は残念そうに沈黙している

華奢な男「僕と隼人は他を探すお前は どうする？」

少女「わたしはそのビルをもう一度さがしてみるわ、何か手がかりがあるかもしれない」

華奢な男「わかった何かあったら連絡する。だが無理はするなよ」

そういつて電話を切ると二人組みの男は建設ビルを後にしたそしてケータイで連絡を入れた少女はひとり不審な男が入ったビルへと向かっていった。

一方その頃ラブたちはタルトとシフォンと呼ばれる不思議な生き物と再会していた。

ラブ「うわっく本当にシフォンとタルトだよ」

ラブはシフォンをやさしく抱きしめる。

シフォン「らぶー、らぶー、」

タルト「いやあーこうしてまたあんさんらに会えるなんてホンマ夢のようやで」

美希「そうね、数ヶ月しかたってないけどなんだか久しぶりな気がするわね」

祈里「わたしもシフォンちゃんやタルトちゃんにまた会えてうれしい」

そういつて祈里はタルトの頭をなでただがラブはあることに気がつくのであった。

ラブ「あれ？でも二人ともスイーツ王国帰ったんじゃない？」

祈里「あっ！もしかして会いに来てくれたの？」

タルト「ちゃうちゃう、実は長老からあんさんらに言付を頼まれとったんや」

ラブ「言付って？」

美希「長老がなんて？」

タルト「実はな…」

タルトは真剣な顔で語り始めた。

この世界にはパラレルワールドと呼ばれる数多くの平行世界があるタルトとシフォンはスイーツ王国と呼ばれる異世界の住民であった。スイーツ王国には長老ティナミスと呼ばれる鳥のぬいぐるみをした妖精が存在し

スイーツ王国代々語り継がれてきた予言に従いタルトとシフォンに伝説の戦士

プリキュアの素質を持った者探させるためにラブたちの世界へと送ったそして

管理国家ラビリンスの暗躍の中でタルトとシフォンは4人のプリキュアを

見つけ出すことができた、ラビリンスの戦いの後タルトとシフォン

は故郷の世界

スイーツ王国へと帰っていったしかし今から数日前の出来事
スイーツ王国ではここ数日夜になると月が不気味なくらい血のように
紅く輝いていたタルトはある日スイーツ王国の長老に呼び出されて
いた。

長老「おお！タルトよくきよったな」

タルト「長老話ってなんですか？」

長老「うむ、実はな最近なにやら妙な胸騒ぎがするんや」

タルト「胸騒ぎって、どないしたんや？」

長老「ワシの思い過ごしならええんやが…お前も知っとるやろ、
ここ数日お月さんの様子がおかしいのを」

タルト「そういや、最近お月さんの色が真っ赤やな…それがどない
したん？」

長老「ワシは昨日の晩、王宮の中でこの原因不明の
現象について色々調べとったんや」

タルト「ほんでなんかわかったんかいな？」

長老「うむ、王宮の中の書物からなにやら古い子文書をみつけての…
そこにある予言が記されておったんや」

タルト「予言やて！？いったいなんて書いてあったんや？」

タルトは少し不安がった顔で長老に問い尋ねた。

長老「予言の内容はこうや…」

すると長老は深刻な目つきで語り始めた。

長老「紅い月あらわれん時それすなわち災いの予兆の始まりである、
空は曇り冷たき風が流れそして人々の心から微笑みはなくなり草木
や花が枯れたとき

悪しき闇目覚め世界を闇で包み込むであろう…とっ予言に記されて
おったんや」

タルトは啞然としながら長老に質問した。

タルト「いったいなんやねんその予言は？」

長老「気になってスイーツ王国に代々伝わる予言書で照らせ合わせ
てみたんやが…」

タルト「そっそれで！」

長老「予言書にはそのようなこは一行も書かれておらへんかった。」
タルトはホッとため息をついて安心した顔になった。

タルト「予言書に書かれてへんかったら安心とちやうん？」

お月さんもそのうち元に戻るんとちやいますの？」

長老「しかしや、もしこの子文書に書かれた予言が事実やったら
全パラレルワールドはどう考えますのん？」

タルト「それで長老はどう考えてますのん？」

長老「ワシとしてはこの子文書の真偽を確かめたいそこで
国王陛下と話し合って調査の許可が下りたんや」

そのときタルトはなにやら嫌な予感を感じ取った。

タルト「調査って…もしかかってわいがここに呼ばれたんは…」

長老「いや、お前には別のことをしてもらうつもりや。」

タルト「別のことってどがいなことですか？」

長老「シフォン！」

長老がシフォンの名前を呼ぶと鍵の姿をした4色の妖精を引き連れ
て飛んできた。

シフォン「ぷりっぷ〜！」

ピックルン「キィー」

そして長老のところまでやって来た長老は飛んできたシフォンを両
手でキャッチする。

タルト「シフォンにピックルンやんけ！長老ひよっとして！」

長老「うむ、万が一のことを考えてまたプリキュアの力が
必要になるかもしれへんからな…」

タルト「てことはピーチはんたちの世界に行くでつか！」

長老「そうや、そしてプリキュアたちに伝えてほしいんや
近いうち世界に異変が起こるかもしれへんと」

そういつて長老はタルトにしふおんを手渡した。

タルト「よかったなあ〜シフォン〜、またピーチはんたちに会えるで〜」

シフォン「きゅあ、きゅあ〜みんな、あえる」

タルトとシフォンは楽しそうにはしゃいでいた長老は少し不安そうな顔をした。

長老「ゴホン！では頼んだでタルト、シフォン」

タルト「任せといてや、長老」

シフォン「ぷりっぷー」

するとタルトが長老に頼みごとをした。

タルト「あっ！そうや長老ちよっと出発まで時間くれへんか」

長老「どうしたんや？」

タルト「アズキーナはんに出発の挨拶しにいつてもかまへんか？」

長老「ええで、ワシとシフォンはここにおるさかい」

タルト「恩にきりますわ、長老」

そういつてタルトはひとりアズキーナという妖精の元へと向かっていったその姿を

長老は遅しく感じ取った。

シフォン「きゅあ？」

長老「タルトもすっかり成長したもんや…あれなら国王陛下の跡継ぎも心配あらへんな」

タルトはアズキーナと泉で会話していた。

タルト「そがいなわけで、わいまたプリキュアの世界に行くことになったんや」

アズキーナ「タルト様…」

アズキーナは悲しげにタルトを見つめた。

タルト「アズキーナはんそう悲しい顔せえへんでや…」

タルトはなんとかアズキーナを喜ばせようとしていた。

タルト「そうやアズキーナはん帰ってきたらドーナツ沢山お土産に持って帰るさかい楽しみにしてや！」

するとアズキーナは少し涙顔で微笑んだ。

アズキーナ「ホンマでつか！うちあれすごく気に入りましたわ！」
タルト「せやろせやろ、カオルはんのドーナツはメチャうまいで」
タルトとアズキーナは少し笑いあったするとアズキーナの機嫌が直りだした。

アズキーナ「わかりましたこのアズキーナいつまでも

タルト様の帰りを待ちしております。」

タルト「そんじゃあ、行ってきますわ！」

タルトはアズキーナと別れの挨拶をして長老が待つ森へと向かっていった。

タルト「すんまへん長老、待たせてもうた」

長老「もうええんか？」

タルト「もう十分ですよ」

長老はシフォンをタルトに託したタルトはシフォンを風呂敷で包んだ。

タルト「そんじゃあ、長老わいらちよっくら行ってきますわ」

シフォン「ぷりぷ」

タルトは長老の森を出ようとした。

長老「あっ！言い忘れたことがあったんや」
すると長老がタルトを呼び止めた。

タルト「なんや？長老」

長老「プリキュアたちに会ったら「ボンジュールマドマーゼル元気」」

ってよろしく伝えといてや」

タルトは長老の発言に少し萎えた。

タルト「ああ…よろしく伝えときますわ…」

そういつてタルトはシフォンとビッケルンをつれてラブたちの世界へと向かったのである

そしてタルトの回想が終わった。

ラブ「へー、そんなことがあったんだ」

タルト「そうや、たんに長老の取り越し苦労やったらそれに越したことあらへんのやけど」

美希「でも、スイーツ王国の月が赤くなった原因はわからないんでしょう？」

タルト「そうなんや、手がかりは長老が偶然見つけた子文書だけしかあらへん」

祈里「紅い月あらわれん時、空は雲るかぁ…」

祈里は空を見上げた。

祈里「さっきまですぐお天気よかったのに…急に雲ってきちゃったね」

美希「もしかして予言は本当だったりして？」

そう美希はイジワルに冗談を言った。

タルト「やめてやベリーはん…縁起でもないこといわへんでや…」

ラブ「大丈夫だよタルト！たといえんことが起こってもても

あたしたちが世界を守って見せるよ」

タルト「ピーチはん」

美希「ええ、3人になったけど私たちならきつとできるわよね」

祈里「うん、せつなちゃん分までがんばるって信じてる」

タルト「ベリーはん…パインはん…それでこそプリキュアや！」

するとアカルンがなにかに気づいた。

アカルン「キイー！」

シフォンはアカルンを気にした。

シフォン「アカルン？」

アカルン「キイー！！」

するとアカルンは飛び出していった。

シフォン「アカルン！、アカルン！」

シフォンの声にラブたちも気づいたアカルンが何処かへと飛んでいく美希「アカルンが！どうなってるの？」

タルト「わからへん、考えられるとしたパッションはんがこの近くにおるちゅうことやで！」

ラブ「せつなが！」

ラブはアカルンを追っていく！

祈里「あっ！ラブちゃん！」

美希「とりあえず、私たちもアカルンを追いましょう」

するとドーナツを買いに行ったミュキがようやく戻ってきた。

ミュキ「ごめんね。ドーナツが込んで…あれ？」

祈里「あっミュキさん、すいませんちょっと私たち用事があるんですぐに戻ってきます！」

ミュキ「えっ用事って？」

タルト「ミュキはんお久しゅう」

ミュキ「タルトくん？」

突然の出来事にミュキはただ唖然としていた。そしてラブたちはアカルンが

飛んでいく方向を追っていく。その頃さきほどケータイで会話していた

少女がサングラスをかけた不審な男が入っていくビルの入り口まで来ていた

少女の特徴は青のかかった黒髪に赤い瞳であった。少女がビルに入ると先ほどの

二人組の男たち同様捜し歩いた。そしてサングラスの男が入って姿を消したという

あの大鏡があった部屋へとたどり着いた。

少女「あと残っているのはこの部屋だけね…」

少女は大鏡の部屋を調べ始めるしかしこの部屋は隠れるような場所はありません外から逃げたにしても

窓はすべて閉じていて密室の状態であった。

少女「たしか二人がこの部屋に入った時には既にセントラルの姿はなかった…」

少女は冷静に考えるする

少女は「窓は全て閉まってる外に逃げたを考えるのは不自然ね、

だとすればまだこの部屋に…」

そう少女は考える。

「でもこの部屋は探しつくしたわ…!？」

と少女は目の前にある物の存在に気づいた。

少女「鏡…」

少女の目の前にはひとつの大鏡が立ててあった。

少女「まさか…」

少女の記憶にある出来事が脳裏で蘇る。その記憶は少女が母と呼んだ友人の母親が怪物と入れ替わった話である母親と入れ替わった怪物は少女の友人の家に行き本物の母親になりすます。少女はすぐに偽者だとわかり本物の母親を探しに行った。そして少女は手洗い場の鏡の中から本物の母親を見つけ出したというあまりにも非現実的な記憶であった。

そして少女は鏡の前で立ち止まった。

少女「セントラル…いるのよね」

少女は鏡に向かって語りかけたすると鏡が突如光りだした。

少女「!？」

「ああ…見つからないと思ってたんだがね…残念…」

すると鏡の中から声がしだし中から人影が現れた。

少女「セントラル!？」

すると鏡からひとりの不審な男が出てきた。

それは少女たちが探していたセントラルと呼ばれる男である。

セントラル「もう少しかくれんぼで遊ぼうと思ったんだが…バレてしまったらしかたない」

セントラルと呼ばれる男は不気味に微笑みだす。

セントラル「で?俺になんのようだ、イース」

少女「とぼけないで、あなたがこの世界でやろうとしてることを止めに来たのよ!」

イースと呼ばれた少女はセントラルの間に答えた。

セントラル「おれが…やろうとすること…」

少女の答えにセントラルの表情は変わった。

セントラル「なんだそんなことか…」

少女「そんなことって！あなたがやろうとしていることは…」
するとセントラルは語り始めた。

セントラル「なあイス、メビウスの支配から解放され俺たちは皆自由になった…そうだよな」

少女「………」

少女は沈黙した。

セントラル「これからは自分達のために生きることができんだからな」

セントラルはとても穏やかな表情で語った。

セントラル「皆好きなことをすればいいさ…メビウスに変わり全パラレルワールドの支配者になることもな」

すると少女の表情が一気に変わりだした。

少女「あなたはそんなことの為に大勢の人を不幸にしようとしているのよ！それがわからないの！！」

少女は感情のこもった声でセントラルに怒鳴った。

セントラル「知った事じゃないな、俺の野望を実現させるためにはより多くの人間の幸福が必要なんだよ」

するとセントラルの足元からなにやら一本の杖がでてきた。杖の先っぽはメビウス状の形をしていて真ん中に球体の飾りが付いてあった。

少女「メビウスロッド！まさかそれで…」

少女は杖を見て驚いた。

セントラル「そうこの町の人間どもの幸福を奪い取るために…この世界でこの町から大量の幸福を感じられるそいつを吸い尽くせばかなりの量の幸福が手に入るってわけだ」

すると少女の眼差しが変わった。

少女「そんなことさせない！」

すると少女は自分が持っていた赤いケータイを取り出した。

セントラル「なぜだイース？お前には関係のないことだろ？」

少女「いいえ、ちっとも関係なくなかないわ！」

少女は燃えるように赤い瞳をして語った。

少女「この町の人々はイースであったころのわたしに失った心を取り戻させてくれたその人たちの笑顔を守るためならせいっぱいがんばれるわ！」

するとなにか癪に障ったかのようにセントラルの表情が変わった。

セントラル「心だと！くだらんな」

セントラル「お前とは話があうと思っていたんだがな…」

そういつて男は両手で構えた。

セントラル「スイッチ、オーバー！」

次の瞬間突然セントラルの姿が黒ジャンバーから妙な黒衣装に変わっていった。

しかし少女は動揺せずケータイを構えて続けて語りだした。

少女「そしてみんなの幸せを守るのが私の使命でもあるからよ！」

セントラル「使命だと？イース貴様は…」

少女「わたしはもうイースじゃない！」

その一言にセントラルは疑問して少女に質問した。

セントラル「イースじゃなければなんだというんだ？」

せつな「わたしは東せつな、キュアパッションよ！」

せつなはケータイのボタンを押したすると体が赤い光に包まれた。

せつな「チェインジプリキュア・ヒートアップ！」

やがてせつなは空中に舞いせつなの髪がピンク色に変わり赤い衣装に身を包まれた。

パッション「真っ赤なハートはしあわせの証！」

パンツ！

パッション「うれたてフレッシュ！キュアパッション！」

回想2「あらたな敵、セントラル出現！」（後書き）

更新のほうが一週間遅れちゃって申し訳ございません
回想編は後何話になるかは未定です。
次回はラブたちがせつなと再会します。

回想3「クローバー復活」(前書き)

書いてみて思ったんですが…自分はバトルものを書く才能がないことに気づきました。こんな駄文で申し訳ありません

回想3「クローバー復活」

この日、空は不気味なくらい曇りに覆われ身も凍るような風が吹き荒れていた。

まるで何か不吉な出来事を予兆するかのように：

ほんの少し前まで誰もいなかった建設ビルその3階にある大鏡が立てられている部屋から

なにやら会話が聞こえ出した部屋の中にはセントラルとキュアパッションがにらみ合うように立っていた。

セントラル「イースその姿は？」

せつなの変身にセントラルは驚いた。

パッション「わたしは伝説の戦士プリキュアよ」

セントラル「プリキュア：たしかクラインの報告にあったという：」するとセントラルは嬉しそうに杖を構えだした。

セントラル「まさかお前もプリキュアだったとはな：ククク」

パッション「この世界のしあわせと笑顔を守るためにわたしは負けないわ！」

セントラル「なら俺の野望のために倒させてもらおうとするか！！」そういつてセントラルは杖を握り締めてパッションに向かっていくパッションも構えてセントラルの方へと立ち向かう

パッション「はあ！！」

パッションは拳を強く握りしめセントラルに当てるように拳を振り上げた。

セントラル「おっと！」

セントラルはパッションの攻撃をよけると続けて杖をパッションの方へ大きく振り上げる

セントラル「そっらあ！！」

パッション「はっ！」

セントラルの一振りをなんらかわしパッションは空中に飛び上がりセントラルに目掛けて飛び蹴りを放つ

パッション「たああ！」

だがセントラルはなんらくパッションの蹴りをかわした。

パッション「！？」

パッションが後ろに振り向くとセントラルはいつの間にか窓のほうへと逃げていた。

セントラル「ついてこれるかな？」

パッションを挑発するかのようにセントラルは3階から地上へと飛び降りた。

パッション「待ちなさい！」

パッションも後を追うように飛び降りるとセントラルは建設ビルの入り口で立ち止まっていた。

パッション「セントラル！おにごっこは終わりよ！」

セントラル「ああ、そうしてもらうよ：おにごっこはもう終わりだ」

パッション「！？」

その直後セントラルは懷から何か丸い植物の塊を取り出した。

パッション「ソレワターセの実！？なぜあなたが」

セントラル「こっちに來るとき何個かストックがあったのさ」

そういった後セントラルはソレワターセの実を投げ飛ばし実はヒトデのような形になった。

セントラル「生まれよ！ソレワターセ！！」

するとさっきまで植物の塊が見る見るうちに巨大な植物の怪物へと姿をかえた。

ソレワターセ「ソレワターセ！！」

セントラル「ソレワターセ！！遊んでやりな」

セントラルはパッションの前から消えようとしていた。

パッション「逃がさないわセントラル！」

そういつてセントラルに向かって飛び出そうとするもソレワターセが立ちはだかった。

ソレワターセ「ソレワターセ!!」
パッション「くっ!」

ソレワターセは触手のような腕でパッションに襲い掛かっていく。パッションはすぐに攻撃をかわした。

パッション「しまった!?!」

気づくとセントラルは行方をくらましていた。パッションはただソレワターセと戦うしかなかった。

作業員「なっ!なんだこりゃ!?!」

パッション「えっ?」

パッションが振り向くとその後ろには先ほどまで外出していたビル
の作業員が帰ってきていた。

ソレワターセは作業員に反応し襲い掛かろうとする

作業員「ひい!?!」

恐怖に飲み込まれて動けなくなった作業員

パッション「たああ!」

しかしその時パッションがソレワターセに横からパンチを一撃くら
わせた。不意をつかれ

転倒するソレワターセそのスキに動けなくなった作業員のほうへと

パッションは飛んだ

パッション「怪我はないですか!」

作業員「は…はい…」

パッション「ここはわたしがなんと持ちこたえます!その間に逃げ
て!」

作業員「あ…ありがとうプリキュア!」

そういつて作業員は非難するとパッションはソレワターセに立ち向
かっていく

その頃アカルンを追っていたラブたちパッションがいる建設ビルの
付近まで来ていた。

アカルン「キイー!」

美希「いったいアカルンはどこに行こうとしてるのよ！」

タルト「せやな、アカルンはパッションはんにプリキュアの力をあ
たえた妖精やからな…」

祈里「もしかして、せつなちゃんがこの町のどこかにいるってこ
なのかな？」

タルト「せやな…おるかもしれへんし…おらんかもしれへん…」

美希「どっちなのよ！」

ラブ「ねえ、あれなんだろう？」

ラブが目にしたのはこの近くにある建設ビルの作業員がラブたちの
方へ逃げるように慌てて走っていた。

美希「あの、なにかあったんですか？」

すると美希が作業員を呼び止めた。

作業員「かつ怪物だよ！怪物が現れたんだ！？」

ラブ「怪物！？」

作業員「で…でもプリキュアに助けられて」

美希「プリキュアに！」

作業員「ああ、いまひとりで怪物と戦ってる、危ないから君たちも
早く非難したほうがいいよ！」

作業員達は慌てだしてその場を立ち去った。

祈里「ねえ、もしかして！」

美希「きつとせつなだわ」

タルト「せやけど、怪物っていったいどういうことや！」

ラブ「とにかく、まずはそこに行ってみようよ！」

ラブの発言に美希たちは決意を固めてアカルンが飛んでいく方へと
向かっていく

その時建設ビルのほうではパッションがソレワターセに苦戦を強い
られていた。

ソレワターセ「ソレワターセ！！」

パッション「きゃあ！」

ソレワターセの攻撃にパッションは倒れる。

パッション「はぁ・・・はぁ・・・」

ソレワターセは徐々に近づきパッションを踏み潰そうとする

パッション「!?!」

パッションはなんとか両手でソレワターセの足を支えなんとか押し返そうとする。

パッション「うううう!?!」

しかしソレワターセの力は怯むことはなかったそして徐々にパッションの力を押していった。

パッション「これ以上は...」

ひとりではソレワターセに敵わないそう悟ったパッションそしてパッションは瞳を閉じ覚悟を決めた。

パッション「もう...ダメだわ...」

パッションは支えている手に限界を感じたその時自分以外の何かがソレワターセの足を支えていた。

パッション「!?!」

パッションが瞳を開くとそこには衣装を着た少女が3人ソレワターセの足を支えていた。

ピーチ「諦めちゃあだめだよ、パッション!」

パッション「ピーチ!」

ベリー「そうよ私たちがいるんだから...」

パッション「ベリー!」

パイン「みんなで力を合わせればきっと大丈夫」

パッション「パイン!」

再びパッションは足を支えだした。

ピーチ「みんな行くよー!」

ピーチの合図で4人は一斉にソレワターセの足を同時に上へと押し返す。

するとソレワターセはバランスを崩して倒れてしまった。

ソレワターセ「ソレ...ワターセ...」

ピーチ「今だよみんな！」

するとピーチ、ベリー、パインの3人は腰にぶら下げであるケータイをタッチするとスティックのようなものを取り出した。

ピーチ、ベリー、パイン「悪いの悪いの飛んでいけ！」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン・フレッッシュ！」

ベリー「プリキュア・エスポワールシャワー・フレッッシュ」

パイン「プリキュア・ヒーリングプレアー・フレッッシュ」

するともっていたスティックでハート、スペード、ダイヤの形の光りを描きそれを

ソレワターセへとぶつけた。

ソレワターセ「ソレワターセ！！」

しかし3人の同時攻撃をソレワターセは両手で受け止めた。

その瞬間パッションはケータイをタッチして赤いハープを取り出した。

パッション「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア・ハピネス・ハリケーン」

無数のハートが竜巻となってソレワターセを包み込んだ。

するとソレワターセは3人の攻撃を支えきれなくなりついには光に飲まれる

ピーチ、ベリー、パイン、パッション

「はあああああああああああ！！」

そして4人は手に持っている武器を力いっぱい回し始めた。

ソレワターセ「しゅわしゅわしゅわわあああ」

やがてソレワターセは消滅していった。

回想3「クローバー復活」(後書き)

回想編も次でラストです。

回想4「奪われる幸せ（前編）」（前書き）

もうしわけありません

回想4はちよつと文字数が予想以上に多くて前編後編に変更しました。

回想4「奪われる幸せ（前編）」

ピーチたちがいるビルの方から少し遠く離れた場所で先ほど建設ビルに入って出て行った二人組みの筋肉質な男がひとり腹の虫をならしている。

隼人「ハラ：へった〜」

隣にいる瞬は呆れた顔で言い出した。

瞬「呆れた：お前今どういう状況かわかってるのか？」

隼人「そんなこといわれたって：へるものはへるんだ：」

隼人はあまりにも空腹じみた表情で語った。

隼人「なんか：食べもの：食べものはないか：」

隼人がふらつきながら歩くと隼人の目の前に一台の車が止まっていたそれは

カオルのドーナツ屋であった。

隼人「おおおおお！！こっこんな所に

カオルちゃんのドーナツ屋さんがあるではないかああ！！」

そう隼人は子供のように眼を輝かせた。

隼人「なあ瞬、ちよつとあそこでドーナツ買ってきてもいいか！！」

瞬が目を向けるとカオルのドーナツ屋はムカデのような行列で並んでいた。

瞬「なに言ってるんだ、こんなところで油を売ってるヒマはない！」

隼人「さて瞬、腹がへってはなんとやらだ」

瞬「あのなあ：」

隼人「それにカオルちゃんのドーナツは食べると

幸せになるほどうまい！試しにお前も食ってみたらどうだ」

そういった後隼人は列の後ろに並んでいった。

瞬「本当に呑気なやつだ：」

その頃ピーチたちは戦いが終わり変身を解除して元の姿に戻ってい

た。

ラブ「やったねせつな、」

そういつてラブはせつなの肩をさわる

美希「ええ、4人で力を合わせれば完璧ね」

祈里「わたしまたせつなちゃんに会えるって信じてた」

せつな「さっきはありがとう助けてくれて」

ラブ「いいって、あたしたち友達じゃない」

祈里「同じクローバーのメンバーだもの」

美希「そうそう」

そう言った後、美希はソレワターセとの戦いで地形が変わった地面を見た。

美希「でもどうしてソレワターセがここに？」

せつな「あつそれは…」

タルト「おい、みなはくん！」

シフォン「みんなー！」

するとシフォンを抱えたタルトがラブたちの方へとやって来た。

せつな「タルト！シフォン！」

ラブ「タルトー！遅すぎだよ」

タルト「はあ：はあ：そがいなこと言ったて、あんさんら足速すぎるで…」

息を切らしながらもタルトはせつなの方を見上げた。

タルト「ホンマや！ホンマにパッションはんやで！」

シフォン「せちゆな」

その時せつなは疑問に思った。

せつな「でもどうしてわたしがここに居るってわかったの？」

ラブ「あっ！それはね、せつな」

アカルン「キィー！」

せつなのほうにアカルンが近寄ってきた。

せつな「アカルン？」

ラブ「アカルンがここまであたしたちを導いてくれたんだよ」

せつな「アカルンが！」

美希「ええ、アカルンが飛んでいく方向に進んでいったらせつながいたってワケ」

祈里「アカルンちゃんもせつなちゃんにあいたかったみたい」

せつなはアカルンをやさしく手に取った。

せつな「そうだったの：ありがとうアカルン」

するとシフォンがタルトの風呂敷から飛び出しせつなに近づいた。

せつな「シフォン？」

シフォン「せちゆなくおかえり」

せつな「えっ！」

隣にいたラブはニツコリとした表情でせつなの方を向いた。

ラブ「おかえり、せつな」

美希「おかえり」

祈里「おかえりなさい、せつなちゃん」

せつなはうれしそうに微笑んだ。

せつな「みんな：わたしもみんなにまた会えてしあわせよ」

しかしせつなの笑顔はすぐに暗い表情へと変わった。

せつな「でも：まだ「ただいま」をいえる状況じゃないわ：」

ラブ「えっ！どういこと？」

美希「もしかして、さっきのソレワターセと関係があるの！」

その瞬間ラブは思い出したかのように驚く。

ラブ「ソレワターセ？：そうだよ！なんでソレワターセがこの世界にいるんだろう！」

祈里「たしかに変だよね：」

タルト「ソレワターセってラビリンスの怪物やんか！いったいどうなっとなねん」

ソレワターセという怪物についてラブたちは疑問を抱く中

せつなは真剣な目つきになった。

せつな「みんなに話しておくべきことがあるわ」

ラブ「話？」

せつな「ソレワターセのことやわたしがこの世界に来た理由をみんなに話すわ」

そういつてせつなは語り始めた。

せつな「メビウスとの戦いの後わたしはラビリンスを再建するためにラビリンスに帰った。」

ラブ「そうだよ、ラビリンスは平和になったんだよね？」

せつな「ええ、復興の方は数ヶ月で順調に進んでいたわ：でも」
ラブ「でも？」

祈里「なにか、あったの？」

せつな「いまから数日くらい前に：ラビリンスにひとりの男が現れたの、男の名はセントラル」

美希「セントラル？」

せつな「ラビリンスの幹部のひとりでメビウスから最高幹部候補者とも

言われるほどの男よセントラルはラビリンスの地下に封印されていたメビウスロッドを奪ってこの世界に逃げたの」

ラブ「メビウスロッド？」

せつな「かつて総統メビウスが管理者の証として作り出した一本の杖、その杖は

念じるだけであらゆるエネルギーを吸い取ってしまう恐ろしい力を秘めた杖よ：」

祈里「あらゆるエネルギーってどういうこと？」

せつな「あらゆる力、人の生命、そして人の幸福までなんでも吸い取ってしまうわ」

ラブ「何でも吸い取っちゃう杖：」

美希「ねえ、それってそんなに恐ろしい杖なの？」

せつなはとても不安がる表情で語った。

せつな「ええ：悪用すれば世界を滅ぼしかねないほどに：」
タルト「世界を滅ぼすほどやって！？」

せつなの語った話にラブたちは静まり返るすると突然強い風が

ラブたちの方へと吹き荒れた。

ラブ「キャッ!…さっ寒う!」

あまりの突風の寒さにラブたちの体が震えだした。

美希「なんなのよ?…この寒さ春とは思えないわ!」

祈里「そういえば…タルトちゃんが言ってた予言に書いてあったよ
うな!」

タルト「せや…パインはんの言う通りや…それにしてもホンマ寒い
で!」

せつな「予言?どういうこと?」

タルト「実はな、わいらがこの世界に來たんわ!」

せつなの間にタルトは自分とシフォンがラブたちの世界に來た理由
を順を追って説明したスイーツ王国が原因不明の現象に覆われてし
まったことや、長老が偶然見つけた子文書に書かれてある予言のこ
とやそしてタルトとシフォンは全パラレルワールドに危機が迫って
いるかもしれないという長老からの言付けを伝えるためにラブたち
の世界へやってきたのである。

タルト「というわけなんや!」

祈里「あの予言だと…空が曇って冷たい風が吹くんだったよね」

美希「たしかに…冷たい風が吹いてるけど!」

するとせつながなにやら深刻そうな顔をしだした。

ラブ「せつな?」

せつな「その予言…恐らく現実が起ころうとしているわ」

美希「えっ!?!」

タルト「なんやて!?!」

ラブ「どういうことなの?せつな!」

せつな「セントラルはこの世界のこの町に住む人々の
幸福を吸い取ろうとしているのよ!」

美希「この町って…この四ツ葉町で!」

せつな「セントラルが言うにはこの町の人々は大量の幸福を持って
いるそうよ」

祈里「幸福っていうのは？」

せつな「幸福は生まれもって誰にでもある運のことよ」

ラブ「せつな、もしその幸福が吸い取られちゃった人はいったいどうなっちゃうの？」

せつな「幸福を吸い取られた人は運を失くしたことになる不幸だけが訪れてくるわ」

タルト「不幸だけが訪れるやって！？」

ラブ「それじゃあ！もう楽しいことも幸せなこともやって来ないって事なの！？」

せつな「そうよ…永遠に…だからわたしは余りにも恐ろしい力だと思

い ウエスターたちと共に杖を地下へと封印したの…」

美希「じゃあ、せつながこの世界に来たのは！」

せつな「セントラルは世界の支配者になろうとしてこの町の人々の幸福を吸い取ろうと狙っている、わたしたちはそれを阻止するために来たのよ」

ラブ「それで、そのセントラルは！？」

せつな「ごめんなさい…このビルで見つけたんだけどセントラルが生み出したソレワターセと闘ってる途中取り逃がしてしまったわ…」

ラブ「ううん、せつながあやまることないよ」

祈里「そうよ、せつなちゃんが来てくれなかったら大変なことになってたと思う」

タルト「まっまずいで！」

ラブ「どうしたのタルト？」

突然タルトが大声を上げて隣にいたラブは驚いた。

タルト「このままやったら本当に予言通りになってしまうで！」

美希「予言通りって？ねえブッキー長老が言ってた予言の続きって…」

祈里「えっと…たしか…」

せつな「人々から笑顔がなくなるよ…」

美希・祈里「あっ!?!」

タルト「そっそれやー!」

ラブ「じゃあまさか!?!」

せつな「急がないと!このままじゃセントラルにみんなの幸せが奪われてしまうわ!」

ラブ「幸せが…奪われる…」

美希「せつな、セントラルがどこに行ったか心当たりはないかしら?」

せつな「そうね、セントラルはこの町の幸福を狙ってるから町の外には出ていないはずよ」

恐らく人が大勢居る場所に狙ってくるはずよ!」

タルト「そがいなと言われたって人が仰山集まる場所言うたらいろいろあるで!」

ラブ「でも、やるしかないよ!それにしあわせが訪れないなんて悲しすぎるよ」

美希「そうね、この町の人たちの幸せを守るのは私たちしかないいわ」

祈里「うん、わたしもこの町は人たちにはいつも笑顔でいてほしいもの」

せつな「わたしもみんなと同じ気持ちよ、せいっぱいがんばりましょう!」

人々の幸せを守りたいと願う4人は固く決意するそしてその姿にタルトは涙した。

タルト「みなはん…うう…わいホンマあんさんらがプリキュアで

ホンマよかったと思ってますわ!」

シフォン「きゅあ?」

ラブ「そうとわかったら、こうしちゃいられないよ!」

せつな「まだそう遠くには行っていないと思うわ、二手に分かれて探しましょう」

ラブ「よっし行こうみんな!」

そういつてラブたちは建設ビルを後にしてセントラルを探しに行つた。

回想4「奪われる幸せ（前編）」（後書き）

今度こそ次で回想編ラストです。

正直地震があった日に自分は吞気小説なんか書いてる場合なんだろうかと思ったりしました。なんか自分が情けないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8108q/>

ハートキャッチプリキュア！VSフレッシュプリキュア！

2011年4月6日19時28分発行